

表層批評宣言

蓮實重彦

表層批評宣言

蓮實重彥

筑摩書房

表層批評宣言

一九七九年十一月二十日 初版第一刷発行
一九八四年三月三十日 初版第五刷発行

著 者 蓮實重彦

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二丁目
電話〇三二九一七六五一（営業）

二九四一六七二（編集）

郵便番号一〇一九一

振替東京六十四二二三

三松堂印刷／横信堂製本

◎蓮實重彦一九七九

1095-82118-4604

いま、ここに読まれようとしているのは、ある名付けがたい「不自由」をめぐる書物である。その名付けがたい「不自由」とは、読むこと、そして書くこと、さらには思考すること、を介して誰もがごく日常的に体験している具体的な「不自由」である。だが、人は、一般に、それを「不自由」とは意識せず、むしろ「自由」に近い経験のように信じこんでいる。従ってこの書物の主題は、「自由」と「不自由」とのとり違えにあるといえるかもしれない。普遍化された錯覚の物語。その物語の説話論的な持統を担う言葉たちは、だから、むしろ積極的に「不自由」を模倣することになるだろう。ここに繰り上げられようとしている文章は、それ故、ある種の読みにくさにおさまるほかはあるまい。この読みにくさは、選ばれた主題に忠実であろうとする言葉たちの運動から導きだされるものにはかならず、いささかも修辭学的な饒辭を気取るものではない。

この書物の主題ともいうべき「不自由」が、一般には「不自由」と意識されがたいというなら、では、その「不自由」は、人目には触れがたいどこか奥深い地層の内部か、それとも瞳が達しない不可視の圏域といたったところに温存された何ものかとの遭遇として体験されるものなのか。いや、そうではない。いま、この瞬間、誰もがごく身近かに感じとっているながら、その感じとられた生なましい対象を、奥深い影の部分だの、不可視の暗部だのに身をひそめたより確実なものと感じられる何ものかを参照することなしには、それを具体的な対象とは容認しがたいという、徹底して表層的な「不自由」が問題なのである。人が意識しないもの、あるいは意識するのを回避するもの、それは、のっぺら棒な表面だ。距離の意識も方向の感覚も対

象の認識に貢献しえない、中心や深さを欠いた環境としての表面。「知」は、この環境を、距離の意識と方向の感覚とに従って分節化しようとする。ところでその分節化を可能にする距離と方向とは、実は、すでに分節化されている、したがって決していま、ここにありはしない抽象的な環境の中にあらかじめ刻みつけられたものにすぎない。だから、あらゆる分節化の試みは、「不自由」への馴致を前提としている。そして、その「不自由」を「自由」と錯覚することで、人は「知」と呼ばれる抽象と折合いをつける。存在を分節化することで二義的な分節化をうけいれるかにふるまうこの抽象的な「知」に対して、ここでは、距離も、方向も、深さも、中心も欠いた表層の体験が顕揚される。だが、それは、できればそうあることが望ましいと夢想されるが故に顕揚されるのではなく、日常的に体験されていながらもその生なまじい存在感があつさと虚構化されてしまっているのだ、その虚構化の運動に抗うべく顕揚されねばならないのだ。

「自由」と錯覚されることで希薄に共有される「不自由」、希薄さに見あつた執拗さで普遍化される「不自由」。これをここでは、「制度」と名づけることにしよう。読まれるとおり、その「制度」は、「装置」とも「物語」とも「風景」とも綴りなおすことが可能なものだ。だが、名付けがたい「不自由」としての「制度」は、それが「制度」であるという理由で否定されるべきだと主張されているのではない。「制度」は悪だと述べられているのでもない。「装置」として、「物語」として、「風景」として不断に機能している「制度」を、人が充分に怖れるに至っていないという事実だけが、何度も繰り返して反復されているだけである。人が「制度」を充分に怖れようとはしないのは、「制度」が、「自由」と「不自由」との快い錯覚をあたりに煽りたてているからだという点を、あらためて思い起こそうとすること。それがこの書物の主題といえはいえよう。その意味でこの書物は、いささかも「反制度」的たろうと目論むものではない。あらかじめ誤解の起こるのを避けるべく広言しておくが、これは、ごく「不自由」で「制度」的な書物の一つにすぎない。

表層の顕揚を志向しつつもろの距離と深さとにとらわれて生きるしかない書物。その点からして、一つの遊戯的な姿勢が導きだされてくる。それは、「倒錯」の姿勢である。「制度」の機能を意図的に模倣しな

がら、その反復を介して「制度」自身にその限界を告白させること。あるいは「制度」がそうした言葉を洩らしそうになる瞬間を組織し、そのわずかな裂け目から、表層を露呈させること。「物語」の説話的持続の内部に、その分節化の磁力が及びえない陥没点をおのずと形成させること。そのためにも、いたずらに「反制度」的な言辭を弄することなく、むしろ「制度」の「装置」や「風景」を積極的に模倣しなければならぬ。そうした戦略的倒錯によって実現される表層の回帰こそが、ここで「批評」と呼ばれている体験なのだ。その、表層と呼ばれるどこでもない場所で、言葉は、はじめて「物語」の分節「装置」から「自由」になるだろう。その「自由」は、「不自由」ととり違えられることのない荒唐無稽な「自由」であり、距離の意識と方向の感覚とを欠落させた何ものかの生なましい到来と呼ぶべきものだ。この生なましくもあつかましい何ものかの荒唐無稽な浮上ぶりを、人は誰もが体験的に知っているはずだ。それでいながら、その過剰なる何ものかは、たえずころあいの「記号」に還元されて、遭遇というあの単調な「物語」を再生産することと終ってしまう。そのことに、もっと苛立とうではないか。そして、その表層体験の記憶を、より生なましい現在として世界に向けておし拡げようではないか。「批評」とは、存在が過剰なる何ものかと荒唐無稽な遭遇を演じる徹底して表層的な体験にはかならない。この体験を「文学」から解放し、経験のあらゆる本準へと向けて拡散させようではないか。

目次

表層批評宣言に向けて i

言葉の夢と「批評」 3

表層の回帰と「作品」 43

健康という名の幻想 87

倒錯者の「戦略」 131

風景を超えて 167

あとがき 218

表層批評宣言

à Chadou

言葉の夢と「批評」

I 批評と夢

書くこと＝消すこと

たとえば「批評」をめぐるって書きつがれようとしながらいまだ言葉たることができず、ほの暗く湿った欲望としての自分を持てあましていただけのものが、その環境としてある湿原一帯にみなぎる前言語的地熱の高揚を共有しつつようやくおのれを外気にさらす覚悟をきめ、すでに書かれてしまったおびただしい数の言葉たちが境を接しあつて揺れている「文学」と呼ばれる圏域に自分をまぎれこまそうと決意する瞬間、あらかじめ捏造されてあるあてがいぶちの疑問符がいくつもわれがちに立ち騒いでその行く手をはばみ、そればかりか、いままさに言葉たろうとしているもののまだ乾ききつてもいない表層に重くまつわりついて垂れさがってしまうので、だから声として響く以前に人目に触れる契機を奪われてしまうその生まれたての言葉たちは、つい先刻まで、自分が言葉とは無縁の領域に住まっていたという事態を途方もない虚構として忘却し、すでに醜く乾涸びたおのれの姿をよりはや郷愁すら宿つてはいない視線で撫でてみるのがせいぜいなのだが、そんなできごとが何の驚きもなく反復されているいま、言葉たるために耐えねばならぬ屈辱的な試練の嘆かわしい蔓延ぶりにもかかわらず、なお「批評」をめぐるって書きつがれる言葉でありたいと願う湿った欲望を欲望たらしめているものが、言葉そのものの孕む不条理な夢の磁力といったものであり、しかも、その夢の目指すところのものが、言葉自身による「批評」の廃棄

というか、「批評」からそれが批評たりうる条件をことごとく奪いつくすことで「批評」を抹殺し、無効とされた「批評」が自分自身を支えきれずに崩壊しようとするとき、かりに一瞬であるにせよ、どことも知れぬ暗闇の一劃に、人があつまり「文学」と呼んでしまいがら究めたこともないものの限界、つまりはその境界線を投影し、かくして「批評」の消滅と「文学」の瞬間的な自己顕示とが同時に進行すべく言葉を鍛えておきたいという書くことの背理の確認であるとすれば、誰しも、おのれ自身の言葉の幾重にも奪われているさまに改めて目覚め、書き、そして読むことの不条理に意気阻喪するのまた当然といわねばならぬ。

だが、この当然さは、いささかも人びとによって共有される気配がないばかりか、かえって抽象と戯れる不毛な言説と断じられ、知的想像力が捏造する不条理としてあっさり回避されてしまうので、言葉の孕むべき夢をこともなげに抹殺することが書くことの同義語となり、誰でもが書けば書け、読めば読めてしまうという眩暈なしには信じがたい言葉の変幻自在な相貌に触れても、誰もが新鮮に驚くことを忘れてしまうといったかたちで事態が進行してしまうのだが、そんなありさまを呆気にとられるふうもなく凝視しうる連中に欠けているのは、言葉の夢、それもできれば美しくありたいといったロマンチックな夢ではなく、言葉を書き、読みとる瞬間ごとに言葉が夢みよと強要しかかるきわめて具体的な夢、つまりは、すでに書かれてしまった言葉で汚染されてはいない空間にふと生まれ落ち、言葉ならざるものから言葉へと移行するそのまばゆい航跡をゆっくり時間をかけて享受しつつ、しかも別の言葉たちと触れて匿名化される以前の艶やかに湿ったその表皮の始源的な隆起や陥没ぶりを、これまた言葉に汚染されてはいない個体の無垢の視線で、それ自体がエロチックな行為であるとも意識されぬままに深々とまさぐられてみたいと

いう不可能な夢にはかならない。

だがなぜ、冒頭から「夢」なのか。しかも「不可能な夢」が問題とされねばならぬのか。いうまでもなく、みずから言葉であることに疲弊しきった言葉が徐々に減摩してゆくほかはない自分の崩壊ぶりを忘れるために見る夢とは異質の夢がここで問題なのだが、それは、言葉として生命を不断に奪われ続けている言葉が、おのれを奪う諸々の障害の総体を一挙に可視の領域に露呈せしめんとするときに夢みる、禁忌の構造の透視図としての挑戦的な夢であって、つまりは逃れがたく「文化」の領域に位置づけられて生きるしかない言葉が、かりに不可視の領域にいつもは身をひそめるものであるにせよ、それが「文化」である限りにおいて持っている「体系」としてのもろもろの規制作用を逐一あばきたててみたいという実践的な夢を、言葉は、書きそして読む瞬間ごとにわれわれに夢みよと誘いかけていたのであり、まさにその瞬間、読みかつ書いている主体がいささかも自由ではなく、読み書きを可能にした「文化」という名の環境によって深々と犯され、言葉への至上権はおろか、思考することの自由までが奪われているのだという現実を提示しつづける夢こそが問題なのだが、実際、そんな夢に汚染せずしてどうして「批評」が語れるというのか。

言葉の孕む夢

「夢とはこうしたものだ」と、あるユートピア旅行記『表徴の帝国』（宗左近訳、新潮社、但し外国文の引用は蓮實による。以下同様）の冒頭にロラン・バルトはこう記している。「自分の知らない外国語（そして奇異なる国語）に通曉しながら、しかもそれを理解しないでいるということ。つま

り、その国語のうちの差異を感知しながら、その差異が、伝達や通俗的理解といった言語の表層的な社会組織によっていささかも標定されることがあってはならない。未知の国語のうちに実質として屈折しているフランス語の不可能性を認知すること。想像しがたいものの体系性を学ぶこと。他の切断法、他の統辞論の効果のもとで、われわれにとって現実的なものを崩壊させること。言表行為のうちに思ってもみなかった主体の位置を発見し、その地誌学を転移せしめること。ひとことというなら、翻訳不能なるものの中へと降下し、われわれの内部で西欧の総体が動揺し、父親たちからうけついだ国語がぐらりと揺れるにいたるまで、翻訳不能なるものの振動を感知し、それを決して減衰させずにおきたいという夢である」。

ここで一つの言語的理想境として語られている「自分の知らない外国語（そして奇異なる国語）」がたまたま日本語であったという点はさして重要とも思われないが、『物語の構造分析』や『S/Zーバルザック「サラジヌ」の構造分析』、あるいは『記号学要理』といった論文や著作によって、構造主義的熱病が蔓延した後のフランスにいやというほど生み落された「体系」の人の一人ぐらいに考えられているロラン・バルトが、実はその発話行為の場そのもので語ろうとしている自分を犯している西欧「文化」の総体を、言葉を奪いその自由な流通を阻害するいまわしき装置としてあばきたて、それを完全に破壊しつくすことはできぬにしても、その捉えがたい構造をまざまざと触知しうる環境を夢みることなしにはいられない「夢」の人だという点を、見落すことがあってはならない。「批評」をめぐる書くとうるとき、「批評とは何か?」、「何故、批評なのか?」といったてあいの疑問符を捏造しながら、たかだか根源的など呼ばれる程度の問題を口にして書くことの、不自由を曖昧にやり過すのではなく、「批評」について書きつらねられ

ようとする言葉そのものを途方もなく希薄化し、遂には凡庸な匿名性へと埋没させてしまう力が何であるか、その機能するありさまを事件として生きうるには、言葉の「夢」にことのほか感じやすくあることが必須の条件だとバルトが語るとき、「批評」たろうとする言葉は、書くことがおのずとその対象を消すことにつながる夢を夢みるものでなければならぬというのもまた当然だろう。

書くことで「批評」を消してしまふこと。そして「批評」の消滅が、「小説」と「詩」と「戯曲」とが曖昧にもたれあうことでかろうじて保たれていた「文学」に深刻な地殻変動を誘致し、その危機的な変動の過程で崩壊に瀕した「文学」が、普段は人目にさらすことのまれな「体系」としての限界領域を露呈しつつ醜い延命をはかる一瞬を不意撃ちすること。そうしたものが言葉の孕む夢の目指すところであるというのは、書かれ、読まれるものとして「小説」や「詩」がある限りにおいて、逃れがたく「文化」の一劃に組み込まれてある「文学」が、あるとき不意に「文化」であることをやめ、その「体系」から離脱しつつその枠組みをおし崩し、あとに残されただけとも知れぬ時空で言葉と存在との無媒介的な遭遇を許しはせぬかと夢みることなしに書くことが、醜いまでに「文化」的な病癥であるにはかならぬからだ。未知の響きと輪郭とを回復した言葉やイメージが飛びかう空間に、盲目の瞳と聴覚を失った耳とをせいっぱいおし拡げ、音としては響かぬ声、輝くことのない色彩の戯れを存在の最深部まで招きよせ、そうある自分を幾重にも増殖させながら孤立と連帯とを同時に生きたること。そんなとき、再現すべき対象のない模倣の仕草が、創造の仕草と一つに溶けあってゆくのではないか。

たとえばそれを「文化」の領域に据えてみた場合、マルクス、フロイト、ソシュール、レヴィ

ストロースといった「文化」的相貌のもとにたやすく傷つく無数の言葉を孕み持った吉本隆明の『言語にとって美とはなにか』（勁草書房）と題された一冊の書物は、「言語学」、「精神分析学」、「文化人類学」などの「文化」的体系の中に住まう言葉からの執拗な、そして執拗であるからにはおのずとその限界を露呈せざるをえない攻撃にさらされており、もちろん、その攻撃のいっさいが無償の饒舌だとは断定しえないが、にもかかわらずなお吉本氏の言葉が言葉として自分を支えうるのは、それが言葉自身の孕む夢を虚構として切り捨ててはいないからだ。「たとえば狩猟人が、ある日はじめて海岸に迷いでて、ひろびろと青い海をみたとする」と吉本氏は「発生の機構」と題された冒頭の一節で「言語の本質」を探りつつ書いている。「人間の意識が現実的反射の段階にあったとしたら、海が視覚に反映したときある叫びをへうへうと発するはずである。また、さわりの段階にあるとすれば、海が視覚に映ったとき意識はあるさわりをおぼえへうへうへう」という有節音を発するだろう。このときへうへうという有節音は海を器官が視覚的に反映したことにたいする反映的な指示音声であるが、この指示音声のなかに意識のさわりがこめられることになる。また狩猟人が自己表出のできる意識を獲取していればへうへうという有節音は自己表出として発せられて、眼の前の海を直接的にではなく、象徴的（記号的）に指示することになる。このとき、へうへうという有節音は言語としての条件を完全にそなえることになる」。

差異の概念を導入することなく音声の記号化に言及しているという意味でまさか、と言語学者は絶句するだろうし、言語学者ならずともそれに似た反応をみせるに違いないこの段落において、動物的な条件反射から意識的なしこりをへて自己表出としての指示性を獲得するという言語発生をめぐる吉本的な語彙の強引な展開ぶりに苛立つことは、ほとんど意味を持つてはおらず、狩猟

人と青い海との遭遇によって、フランス人ロラン・バルトが日本語のうちに認めた言語的理想境と同質の風景を構築した吉本氏が、「われわれの内部で西欧（日本）の総体が動揺し、父親たちから受けついで国語がぐらりと揺れるにいたるまで、翻訳不能なるものの振動を感じし、それを決して減衰させずにおきたいという夢」をそのきわめて具体的な相貌において記述しているという点が何より重要なのだ。もちろんここでの吉本的な狩猟人は、西欧人バルトが苛立っている「体系」の重みをまったく背負ってはいないかにみえるが、実は、この狩猟人と海との遭遇を、人類の歴史的な一時期に、ことによったらありえたかもしれない事実としてではなく、言語的な環境にあつてたえず起りつつあるはずなのに、それが不断に起りそびれていることへのいきどおりに近いものとして想像している吉本隆明を認めることこそが、言葉の夢にふさわしい読み方というものだ。おそらく海ばかりでなく「青さ」そのものを知らなかった吉本氏の狩猟人は、それを色彩として捉えうる瞳を持たぬままに、自分が洩らしたとも知れぬへうの音の声としては響かぬ共鳴ぶりに捉えられて立ちつくし、それがまだ聴いたことのないある響きに酷似していることをすばやく察知するに違いない。

たとえばそのある響きが、藤枝静男の『欣求浄土』（『藤枝静男作品集』筑摩書房）と呼ばれる途方もない書物の底から響いてくることを海辺の狩猟人が模倣と同義語の創造によって知っていてなぜいけないか。穢土の隆起し陥没する表層を足まめに彷徨しつくしたあげくに「とうとう」死んでしまい「腎臓も、眼球も、骨髓も、それから血液も、残して役にたつだけのもの」のいっさいを病院に残し、「水面からの反射光とも、空からの光りともつかぬ、白っぽい光線が」遍満する生まぬるい春の湖上を未知の身軽さで渡ってゆく主人公の章が、「累代之墓」の下に拡がる「あ